

幕末明治の画像情報とその目録編成について

岩 下 哲 典

青山学院大学

近年、画像情報を歴史分析に用いる手法がさかんになっているが、幕末明治期の種々の画像史料、すなわち錦絵、瓦版、番付、双六、写真などは、「幕末情報世界」を特徴づける史料であるだけに、その数量も膨大で、現在のところその全貌を把握するまでに至っていない。本報告は、この全貌把握のために必要な、所在書誌データベース構築に向けて歩みだした絵画情報研究会の目録編成を紹介する。また報告者が携わった徳川林政史研究所の幕末明治の写真目録の編成も報告する。報告者は、この時期の画像史料は、おのおの形態が異なるために、抽出する情報に精粗、多様性がみとめられ、同一データベース上での運用は困難と考える。しかし、これらの画像史料のデータベースをリンクさせて、相互に補完すると、より豊かな「幕末明治の情報世界」がみえてくるのではないかと考える。

Cataloging of printed and photograhic materials from the Last Years of Toyugawa Shogunate to the Meiji period

Tetsunori Iwashita

Aoyamagakuin Univ.

This report describes the process of cataloging printed and photograhic materials of the late Toyugawa period and the Meiji period. A team of reserchers, the KAIGAJOHOSHI-KENKYUKAI, was formed for the purpose of cataloging these materials. The cataloging is not yet complete due to the huge number of documents constituting of KAWARABAN, broad sheets, UKIYOE, wood block prints and photograhic. Cataloging has been made difficult by the extraordinary variety of the documents. Nevertheless we have come up with some new information and explanation regarding these printed and photograhic materials and wish to make this praimry report.

1. は じ め に

近年、歴史学界では、「情報」をキーワードにしての、歴史分析がさかに行われている。

その背景には1989年に始まった東欧・旧ソ連の歴史の変動において、文字・言葉・映像などによる「情報」の果たした役割が、重要であったとの現状認識があると考えられる。中でも映像情報（特にTV）の果たした役割は、重大であった。すなわち、これまで社会主義国家が、最重要課題としてきた、「情報」の管理と統制が破綻し、市民が、映像情報からリアルタイムで、今現在、何がおこっているのかを正確に把握、さらにそこから得られた情報の分析を通して、民主的な社会の構築にたいして如何に行動するかを認識し行動した結果が、変動を歴史的なものにしたといえよう。これこそ市民（民衆）の「情報」の収集・分析・活用（情報活動）にほかならない。

翻って、わが国の幕末から明治は、西洋諸国の東洋世界への進出という国際情勢の変動のなかで、如何に日本の独立を保ち、西洋諸国に対峙する近代国家、国民国家を構築するかの、やはり歴史の変動の時代（日本にとっては、危機の時代）でもあった。

そうした時代にあつて、わが民衆は、ただ単に為政者の国家構想に唯々諸々と組み込まれていったのではなく、民衆には民衆なりの思想・精神やそれらを背景にした動向が存在し、この時代の民衆も文字・言葉・映像などの「情報」の収集・分析・活用（情報活動）を積極的に行っていたのではないか。

こうした問題意識を踏まえて、報告者は、幕末維新时期を、わが国の歴史の中で、民衆が、これまで知されることのなかった海外情報や政治・社会情報をもっとも活発に収集・分析・活用した、「民衆の情報活動の時代」と考えた。そして、現今の情勢から考察しても、民衆が情報を収集し分析し活用する場合、当時の瓦版・錦絵などの画像情報が、より重要な役割を果たしたと考え、彼ら民衆の残した風聞集（政治・経済・社会情報を集積した記録類）や民衆のために作成された瓦版・番付・錦絵などの画像史料に注目して、民衆の画像情報の収集と分析・活用を実証的に研究することが、わが国近代社会の成立を考察する際、重要であることを主張するものである。しかしながら、これら当時の瓦版・番付・錦絵などの画像情報は、部分的に紹介されることは多いのであるが、その全貌は、今だ把握されていないというのが、現状である。

そこで、まず、こうした幕末から明治の民衆の史料を、多数所蔵する国立国会図書館、東京大学史料編纂所などの幕末明治期の関係画像史料を調査し、どのような画像史料がどのくらい存在するのか、という所在情報を提供する書誌的データベースを構築することを同学の方々と始めた。すなわち宮地正人・広瀬順昭・宮地哉恵子氏と報告者を中心とした絵画情報史研究会が発足した。

今回は、この絵画情報史研究会の画像情報データベースの構築の概要を報告し、あわせて、報告者が目録編成を担当させていただいた、徳川林政史研究所の幕末・明治期の写真史料の目録編成方法を紹介して、瓦版・錦絵・写真という幕末・明治の画像情報の目録編成に関して報告したい。その際、報告者の主として携わった、画像史料から何を読み取り、文字情報としてデータベースにインプットするかという部分（画像情報の文字情報化）に限定して報告する。

2. 錦絵のデータ入力表作成マニュアル

これは、錦絵の画像情報・文字情報を入力するためのデータシートである。タイトル（錦絵中の題、錦絵の貼込帳および叢書名、無題のキーワード）、画工名、時代、版元（版元名、住所）、版・刷・判・形態、検印、画題分類、固有件名（国名、地名、人名、その他）、所蔵機関、インデックス作成に伴う指定コマンド入力表（画題分類、画工典拠、英文タイトル、英文画工名、その他書誌事項）の項目のあるデータシートを作成した。詳細は、絵画情報史研究会・宮地正人編『幕末・維新时期の風聞書等にみられる瓦版・錦絵類の基礎的研究』絵画情報史研究会・平成6年11月30日発行を参照されたい。

3. 画題索引について

これは、画題を分野別に分類して、コードを付したものである。分類表の大項目のみ示す。Ⅰ政治、Ⅱ幕府・皇室・華族・外国元首、Ⅲ議会・内閣・政党・選挙・外国議会、Ⅳ軍事・騒動・戦争、Ⅴ教育・女性・社会、Ⅵ衛生・災害・暦・怪異、Ⅶ産業・経済・交通、Ⅷ土木・建築、Ⅸ文芸・娯楽・演劇・スポーツ、i人物画・歴史画・動植物画・風景画・風刺画・番付・地図・絵図、ii瓦版・ジャーナリズムである。画題分類の付与の仕方やそれから判明することなど具体的にに関しては、『幕末・維新时期の風聞書等にみられる瓦版・錦絵類の基礎的研究』および、広瀬順昭・宮地哉恵子「錦絵情報を読む（1）（2）」『日本古書通信』785・786号を参照されたい。

4. 固有件名・件名索引について

固有件名・件名索引は、その画像情報に固有の、読みとった件名そのものを検索手段とするものである。主として画題索引でフォローできなかったものを採用する。また、これまでの錦絵研究の蓄積を参考にして件名を付与し、それらの研究からのアプローチをも容易にするための検索手段と位置付ける。

4・1 固有件名・件名の付与の仕方

①錦絵の画中に記されたり、あるいは、画題・モチーフからはっきりわかる件名を付与する。ただし、絵師・彫師・版元以外の固有名詞および画かれている事物を固有件名・件名としてを採用する。それらをa 国名・b 地名・c 人名・d その他の欄に分けて記入する。なお、a 国名・b 地名・c 人名は固有件名となり、d その他は、件名となるが、d その他には、a b c 以外の固有件名も記入することがある。

②a 国名では、例えば、国立国会図書館古典籍資料室所蔵の錦絵貼交帖「古登久爾婦里（上）」の内の、芳虎描く「外国人物尽・亜墨利加」は、標題から「アメリカ」と記入する。すなわちa 国名には、主として外国の国名を記入する。その際、「亜墨利加」は、今日では、「アメリカ合衆国」とするのが正式であるが、便宜上、通称の「アメリカ」を用いることとする。他の国に関しても概ね通称を用いる。日本における古代律令国家によって制定された国郡制による国名、例えば武蔵国、相模国などは、b 地名に記入する方がよいだろう。

③b 地名は、a 国名の外国国名以外の地名一般を記入する。例えば、国郡制の国名、郡名、郷村名、近世の城下町名、宿場名、在郷町名、港町名、門前町名、各町の中の町名・地名、村名、村名の中の地名、近代の都道府県名、市町村名、大字、小字、街道名、道路名、鉄道線名、また山野河海といった自然に付与された地名などである。

なお、同一地名が複数の個所を示す場合は、たとえば「府中（静岡）」「府中（東京）」、「御殿山（静岡）」「御殿山（武蔵野市）」「御殿山（品川）」などとして現在の地名を補った。

④c 人名は、絵師・彫師・版元以外の人名で、画中の詞書・和歌・俳句などの作者名、画中画（こま絵を含む）の絵師名、画中の登場人物名を記入する。その際、その絵における役割（詞書・和歌・俳句・こま絵などの制作）が判明する者は、人名の後に（詞書）（和歌）（俳句）（こま絵）などと注記する。役者絵では、役者名と役柄名を記入するが、「役者名（役柄名）」とする。ただし、九世市川団十郎が虎屋東吉を演じた場合は、「市川団十郎・九代目（虎屋東吉）」と記入する。

⑤d その他には、a 国名・b 地名・c 人名以外の、画中より読み取ることができる様々な件名および錦絵の種類などで、画題索引には採用されていない錦絵の種類・様式なども記入する。ところで、神社仏閣等の建築物名や橋梁名、墓碑名、石碑名や例えば「千束の池袈裟懸松」のような植物など、地名とするにはやや違和感のある固有件名ものに関してもd その他に記入する。また、開化絵の場合は、具体的な文明開化の様相がわかるように、例えば「男性（椅子）」「男性（マント）」「男性（洋傘）」「乗合馬車」「馬車」「蒸気車」「蒸気船」「人力車」「自転車」など読み取ることが可能なものをできるだけぎり記入した。

4・2 件名の使い方

前節のように作成した錦絵データ入力表の固有件名から、さらに固有件名を3つと一般件名を3つまでを抽出し、コンピュータに入力して錦絵データの固有件名1-3および件名1-3を出力した。

ここではこの固有件名1-3および件名1-3を検索手段として用いると、どのような調査・研究に対する支援が可能となるかということに関して、現段階での見通しを簡単に述べておきたい。

まず第一にa 国名・b 地名・c 人名の各項目別にデータを出力すれば、錦絵においてどのような国名・地名・人名が最も多く用いられていたのか、また最も用いられ方の少ないものは何かが判明する。そして、全錦絵のデータが集積されれば、どの国が、どの都市が、どこが、はたまた、誰がもっとも多くモチーフとして用いられていたのか（最も用いられることが少なかった外国・都市・場所・人は何か）を数量的に把握することが出来る。すなわち、そのデータは、庶民の異国観・都市観や、行楽地選択に際しての意志決定基準や、庶民に好まれた人物像などを研究対象とする場合、その傾向を我々にはっきり示し、またそこから研究をさらに深化させるの有力な手がかりとなると考えられる。

また、近年注目されている幕末・明治の古い写真の目録編成作業の中で、例えば写真の裏に「蓬来社」と記入されていた場合、固有件名で「蓬来社」を検索すれば、国立国会図書館の「東京開化三十六景汐留蓬来社」（別8222-10）にヒットする。そこで先の写真とこの錦絵を比較して、実際に蓬来社であるのかどうか、また写真裏や封筒などに注記がなされている場合、その注記が正確かどうかを判断することが可能となるのである。すなわち、このことは、このデータベースが完成した暁には、幕末・明治の古い写真の研究とタイアップすることでよりビジュアルで、より具体的で、より正確な、幕末明

治期の歴史学研究が期待できるのである。

つぎに、人名の中でとくに、こま絵の作者、詞書の作者のデータを出力すれば、①どのような人物がどのような錦絵の中でこま絵を描き、また②どのような人物がどのような錦絵の中で詞書を書いていたのか、が明らかとなる。加えて、全データが集積されれば、一人の作者の作品に関しても数量的な把握が可能となる。

またその絵のメインの作者や版元との関係がより明らかとなると考えられる。

さらに、例えば「とり」という女絵師は、現在、歌川国芳の描く「山海愛度図会」シリーズのこま絵の作者としてよく出てくるが、同シリーズの中で「おとり」「とり」「とりよし」「とり女」「よしとり」「よし女」「女よし」などかなり名称を替えている。現段階の錦絵データ入力表では、錦絵に記された名称をそのまま採用しているの、これを出力すれば、どのような種類の名称を用いたのか、が把握でき、その上でデータを年月順にソートすれば、使用名称の変遷表を作成することかできる。その表変遷は、逆に、新出の絵に記された名前から絵の発行年月の推定を行うに際しての道具として利用出来ると考えられる。

件名での索引によっても、該当の錦絵を検索することが可能である。特に、博物館・美術館などの幕末・明治期の展示や幕末・明治関係の書籍出版に際して、関係する図版を検索する場合にも至便である。しかし、件名に関しては、①入力できる数が3件までに限られていることと、②実際に錦絵データ入力表に記入する調査者個々の関心対象に、件名の付与作業が規定される傾向にあるため、同じ錦絵でも調査者によって記入件名が違っていたり、また同一の件名にたいして異なった名称を付与している場合があるという課題がある。したがって、①どの程度共通性のある件名データを集積できるか、②件名の共通名称をどう作るか、③実用に耐えうる件名付与マニュアルをいかに作成するか、など今後十分に検討する必要があると考えられる。

4・3小括

無尽蔵の画像情報から、調査・研究を支援するための共通コードを抽出するというのが、固有件名・件名の付与である。固有件名に関しては、その画像固有のコードであるので抽出もしやすいし、検索も、名称にバラツキがあっても同一の固有件名が検索できるシステムが構築されれば、便利である。

しかしながら、件名に関しては、同じ調査者でも、時期によって関心事が事なるために、同一の事象にたいして別の件名を付したり、またまったく件名を付さなかったりすることがある。いわんや他人をやである。だが、それぞれの関心の有り様の違いは、研究関心の違いによって成り立っているの、こうした「ゆれ」を一概に否定することはできない。そうした認識の上にたって、件名の共通コード化を調査者個人、調査者相互、調査者と利用者間で活発に議論しあうことが必要であると考えられる。

5. 一枚物（番付・双六・瓦版）の調査方法

出版企画から草稿、版下絵、改印、版木彫り、摺りという工程の中でも、かなりの手間暇をかけて行われる錦絵と異なり、改印もなく、単色摺りで、決まったフォームが既に存在している番付、瓦版は、その速報性、報道性が庶民に受け入れられ、事件、事象ごとに多くの番付、瓦版が制作された。また双六は、娯楽であるとともに庶民の教育に果たした役割も大きかったと考えられる。

したがって、庶民の情報活動（情報の収集・分析・活用）の実態を研究する目的の本研究においても番付・双六・瓦版は、それらを知る最も重要な史料の一つである。しかしながら、例えば、1枚の番付だけでも1本の論文が書けるように、1枚1枚の番付・双六・瓦版に含まれる情報量は、膨大である。以上のことから、今回の絵画情報史研究会の一枚物の調査は、それら一枚物からある程度の情報を抽出して目録編成することを主目的としている。この調査は、今後の詳細な研究への第一段階と位置付けられている。

5・1一枚物の調査方法

一枚物の調査にあたっては、前述のように、詳細な研究への第一段階なので、比較的簡略な調査票を使用した。この調査票に記入するデータは、刊本・写本といった書籍の書誌的な情報を記入する場合と大体同じである。しかし、従来の一枚物の目録では、それほど注目されていない蔵書印や旧蔵者、書き込みの有無などを調査することによって、一枚物の流通経路が判明し、一枚物の情報がどのように伝達されたのかを研究する資料とすることができるのである。

「写・刊」では、手写本と刊行本の区別を丸で囲んで表示する。ここでいう手写本とは、刊行本の写しを指す。

「整理区分」には、番付・双六・瓦版の区別を記入する。

「題名」は、原則的には内題を採用した。内題のないものは、外題を採用した。その場合は、「題名(外)」として区別するのが望ましい。また双六などは、当時、販売用に袋(書套など)が付いているものがあつたが大部分は失われている。しかしまれに袋が付いている場合は、袋に記されたタイトルを備考欄に記入することとした。その場合は「題名(袋)」とするのが望ましい。

「著者・校訂者」には、史料中に記された通りの名称を記入した。

「時代」は、出版年を記入したが、明治期の御届日がわかるものは、「年月日御届」などと記入した。双六などで改印のあるものは、改印から年月を確定した。その際は、改印の読み、例えば「丑六改(改印)」などと注記しておくのが望ましい。また調査段階で何の手がかりもなく、不明のものは「不明」と記入した。

「出版事項」は、版元名、その住所・所在地を記入した。明治期の「編輯及出版人」もここに記入した。なるべく史料に書かれているとおりに記入するのが望ましい。

「所蔵巻数」は、一枚物が貼り込まれている貼込帖の叢書としての冊数、卷子本の軸数を記入した。

「蔵書印」は、読み取れるかぎりのものを記入した。また、判読不能の場合は、蔵書印の有無を記入するにとどめた。

「旧蔵者」は、蔵書印、書き込みなど明らかな場合に限って記入した。

「書込」は、その有無と筆の運びで判断できる書込みの数、また同筆・異筆などを記入した。筆跡や書き込みの文面などから書込み者が判明する場合は、備考欄に記入した。

「所在」は、当該史料の現在の所蔵者・所蔵機関名を記入する。「国」は、国の機関、「公」は地方公共団体設置機関、「私」は財団法人など国立以外の法人機関、「個」は史料を個人の財産として所有している場合である。

「請求記号」は、現所蔵機関の史料請求記号を記入する。

「収録叢書名」には、一枚物が貼り込まれている貼込帖や卷子本のタイトルを記入する。この場合、収録叢書名の何巻の何番目の図であるのかを明らかにするために、枝番を付す。例えば、「(収録叢書名)内1冊一(1)」は、1冊の貼込帖の第一番目にある図ということを示している。最後の図では、「(止)」としておくのが望ましい。

「備考欄」には、上記の項目以外の情報や上記項目で補足する必要のある事柄を記入する。

「調査年月日」「調査者」には最初に調査した年月日と調査担当者が記入するが、確認作業などで加筆した場合なども記入するのが望ましい。

5・2 小括

一枚物の調査方法に関して、一般的事項を説明した。多種多様な一枚物を共通コードでくくることはなかなか困難であるが、調査が進んでいけば一枚物にもある程度のパターン化が認められるものと考えられる。パターンを途中で目録編成に用いる場合は、それまでのデータを修正する必要がある。

6. 風聞集の調査方法とデータ表の作成

風聞集(風聞書、風説書、風説留等ともいう)は、その作成者が日々入手したさまざまな情報を書き留めたり、貼り込んだりして出来上がった、幕末期特有の史料である。作成期間や作成者の問題意識、作成者の居住地、交遊範囲等によって、それぞれの集録内容に違いがある。風聞集も一概に述べることは困難で、その全体像を示すことは今後の課題とすべき事柄であるが、今回の調査・研究で得られた結果を踏まえながら、風聞集の調査方法に関して述べておきたい。

風聞集は、ペリー率いる黒船艦隊の来航以来、時々刻々と急激な変化をみせる政治・経済などの現実の社会にたいして如何に対応すべきかという、変革の時代に生きた人々によって作成されたもので、現実社会を理解し、分析し、活用して、そこで生きていくためのいわば道具とでもいえるべきものであると思われる。すなわち時代の要請によって出来上がった情報収集・集積資料であるといえよう。そこで収集される情報は、より正確で現実生活に役立つ情報も求められた。なかには事実の情報とは考えられないような情報や、誤った情報も収録されていることもあるが、そこにはそうした誤った情報を発信・受信した背景すなわち人々の心理・動向がかならず存在し、それらの情報を収集して蓄積した風聞集作成者の態度は、「随筆」のように虚構の中に遊ぶといった態度ではなく、どちらかといえば真剣で、現実の世界そのものである。

それゆえに、これらの風聞集を歴史研究の中心に据えて利用すれば、当時の民衆の動向や心理を相当程度まで理解することができると考えられる。ところが、風聞集はこれまで歴史研究者の目に留まりながら、記録されている情報が断片的である点や情報入手経路のあいまいさ、あるいは情報そのものが学

界において既に知られているといった点から、歴史研究の積極的・中心的史料とはなりにくかった。

しかしながら、今回の一連の調査において、風聞集に収録されている文字情報と画像情報のうち、識字率の低かった当時の庶民にも理解・分析が容易で、かつ情報伝達の手続きもより迅速な画像情報に注目し、その情報を抽出して、調査・研究することで、風聞集の研究、つまり「幕末民衆の情報世界の認識」をより進化することができるという見通しを得るに至った。

6・2 風聞集の調査方法

風聞集の多くは政治・社会・文化に関する情報量が、実に豊富かつ膨大で、中には100冊を超えるものもある。したがって、風聞集の所蔵機関の目録では、風説留のタイトルと冊数のみ記載という場合も多くみられ、細目を探っているものは少ない。

かかる状況下での風聞集の調査では、一冊毎に現物に当たり、画像情報を文字情報に置き換えて抽出し、かつ画像情報を写真撮影する方法を採用した。

以下にその方針を示す。

①抽出基準は、錦絵・瓦版・番付・引札などの現物または写しについては、漏れなく抽出する。

②錦絵・瓦版・番付・引札ではないと思われる画像情報に関しては、まず、江戸・大坂・京以外の地域的・部分的な災害情報に関しては、研究における利用頻度から今回は抽出しない。それ以外の事件・戦争などの非日常的事象や日常の政治的な情報、三都の災害情報に関しては極力採用する。

③画像情報ではないが、政治上重要な風刺を含んだ文字情報はなるべく採用する。

具体的な作業としては、以下のように行った。

まず第一に、画像情報を発見した場合、その前後関係を見極めて、年代を確定し、叢書名、請求記号、冊数、該当巻数と年代、そして画像情報のタイトル、さらに版本か写本かの別を記入した。

この際、タイトルの付け方は、時間的・能率的な点から、統一的なマニュアルを設けず調査者に一任した。したがって史料中のタイトルをそのまま使用した場合も、調査者が便宜的に与えた場合もあるが、それらを区別したものと、区別していないものがある。マニュアルの作成を含めて、これ等の画像情報の文字化については今後の課題としたい。

6・3 小括

今後は、風聞集の同一記事の画像を比較し、その精粗、情報の内容に関して検討すると共に、貼り込まれた書簡などから情報の伝達時間や伝達経路を詳細に調査し、幕末の諸事件に対する庶民の反応を研究することとしたい。

7. 幕末明治の写真史料の目録編成

徳川林政史研究所には、幕末明治から昭和初期までの古写真が、残されている。幕末期は、尾張藩主徳川慶勝が撮影・現像・整理した湿板ガラス写真、紙焼き、アルバム、明治期の写真には、当主義礼や家族、親戚などの紙焼き写真、アルバムが含まれている。また徳川黎明会を創設した義親の撮影・整理した、旅行や熊狩の写真などがある。特に慶勝の撮影したものは、幕末から明治11年までの江戸・東京の町並みや建築物を被写体としたものもあり、それ自体も貴重であるが、他の画像史料と組み合わせることで様々な歴史情報を提供してくれるのである。具体的には、徳川林政史研究所編「徳川林政史研究所所蔵写真資料目録（一）―（五）」『徳川林政史研究所研究紀要』26号―30号を参照されたい。

8. お わ り に

今回の報告は、幕末明治の錦絵、一枚物史料（瓦版・番付・双六）と風聞集中の画像史料、写真という形態的に異なった資料を対象にしている。実はこれらの資料は、相互補完的な資料であり、調査の過程では、それぞれを関連づけることにより時代推定や主題の比定などがかなり明確になることが判明した。結局、それらを総合して、豊かな歴史像を探る試みは、まだまだ先のことといわねばならないが、これらの個々のデータベースをリンクさせ、研究することによって、新しい幕末・明治の地平線が見えてくるのかも知れない。

翻って、「はじめに」の問題意識に戻れば、本研究は、これからの真に民主的な人間社会の構築に際して、市民が「情報」をどのように収集し分析し活用すべきかを示唆するとともに、市民と「情報」の関わりの中で、画像情報の果たす意義を、歴史学として提示するためのごく基礎的な、しかし重要な、そして今日的な研究でもあると考えられる。